れによっていかに当時の開業医がすくわれたかは想像にあまりあるとともに、このような寛恕な取扱いによって、明治九年以降も年々在来医師の数の増加している事実が統計書の上にあらわれている。

明治九年の内務省達も、長与によれば「試験法の試験とも謂うべきもの」であったので、明治一二年二月二四日内務省達甲第三号をもって医師開業試験規則が布達され、さらに明治一六年一〇月二三日太政官布達によって、医術開業試験規則と医師免許規則が完成をみた。これら二度の改正にあたっても、但し書の適応によって在来医師は開業の継続はみとめられ、最終的には明治一七年一月二一日内務省達乙第四号をもって、医術開業許可証保持者に内務省発行の免状が授与されることになり、それまでの開業許可証にかわって開業免状が交付され、死亡するまでその効力が持続することの決定をみた。これによって、年々増加していた在来医師の数は、明治一五年の三八、二一七名を最高として、それ以後減少の一途をたどってゆくことになる。

（東京慈恵会医科大学
順天堂大学医学部医史学研究室）

生野鉱山の塵肺の歴史——一八〇〇年代から一九八〇年代まで——

三浦豊彦

中国地方の生野鉱山では一六世紀にはすでに銀の採掘が行われていた。この鉱山は織田時代から代官がおかれ、羽柴秀吉の所領になったこともあるが、徳川時代には重要鉱山として天領となり、代官がおかれて経営されていた。

この生野鉱山でも、塵肺、ことに珪肺が鉱夫を苦しめていた。「煙」「煙毒」「煙が出る」「よろけ」「疲れ大工」などはこの職業病を意味していた。

文政元年（一八一八）から文政六年（一八二三）にかけ山田仁右衛門が生野代官として在位した。この当時、生野の安星亮庵ら四人の医師が、この鉱山には煙毒で死ぬ者が多数にあり、その家内の女子供からは薬礼がとりにくく、施薬になってしまい困窮しているということで御手当米を出していた記録が残っている。

この山田代官時代の文政二年（一八一九）から文政五年（一八二二）にかけて煙毒死亡者数と患者数を記録した文書が残っている。この間の三年半の煙毒死者は一一七人で、さらに文政五年（一八二二）六月に生存する煙毒患者は二六人であった。

菅江真澄が大葛（おおくず）金山を訪問して「煙」という病気で鉱夫の若死することの記録を残したのが享和二年（一八〇二）のこと、大葛金山の山主荒谷忠兵衛が「金掘病体書」を書いて秋田の医学館に提出、その治療法をたずねたのが文化八年（一八一一）のことだから、東北地方から中国地方まで、大体同時代に「煙」「煙毒」が全国の鉱山で多発していたということである。

佐渡金山では鉱夫のことを掘り大工といい、煙毒のことを「掘だおれ」「疲れ大工」とよんでいた。

天保十三年（一八四二）に幕府の勘定奉行井上備前守から生野鉱山へ下財の煙毒を除くための方法についての通達があった。下財とは鉱夫、金掘り大工のことである。この煙毒除けの方法というのは奥羽金銀山で行っているもので、梅干を多く用意して、鉱夫が坑内に入る前に梅干を口にふくませ、出坑した時に濁酒を一ぱいのませるというものだった。

この煙毒の予防に梅干を使用するという勘定奉行の伝達は実行にうつされ、生野の金持ちの「石川日記」には天保十三年（一八四二）の十一月二十五日に代官所から、生野の金持ち連中に煙毒除けの梅干をとるために梅の木を寄附してくれという回状がきたと書いている。

さらに、天保十三年（一八四二）の十二月五日に、この煙毒除の梅干を割りあてる人数を書きとめた代官所記録が残されている。

梅干を支給する人数として掘大工五二〇人、手子二五三人、樋引七一人、山留一六人、合計八六〇人の人数が記録されている。当時を考えると大鉱山であったことがわかる。

幕臣の勝田次郎は弘化三年（一八四六）から嘉永二年（一八四九）まで生野代官として在位した。勝田は生野鉱山に赴任する時に、幕府の医学館の多紀元堅に煙毒の治療法をたずねたことが、元堅の『時還読我書』の続録に元堅自身が書いている。

そして弘化三年（一八四六）の生野鉱山の庁事備忘録に多紀楽真院（元堅）からの通知が記録されている。それによると、くしゃみをさせて油煙を肺から追い出すために坑内から出てきた時に猪牙皂莢の粉末をかがせるか、なければ「こより」を鼻にさすのもよいと書いてある。

勝田次郎代官の時に小川含章に『生野銀山孝義伝』を著述させているが、このなかにも石煙が油煙に交って肺に入っておこる煙毒と、煙毒人を看護する孝子のことが出ている。

明治になって生野から煙毒の記録は消えてゆく。そして、明治初年、官営になった生野鉱山にはフランス人技師が雇用されて近代化が行われる。

生野の開業医佐藤英太郎が明治二十三年（一八九〇）に「鉱夫肺病ニ就テ」という論文を著わし、煙毒は「塵埃吸入ニ因スル呼吸器疾患即チツエンケル氏鉱夫肺病ニ外ナラサルナリ」と書いている。

この生野鉱山には明治三十年（一八九七）に生野鉱山鉱夫共済組合病院が創立されている。

三菱金属鉱業（株）の生野鉱山は昭和四十八年（一九七三）に閉山しているが、この診療所長の松岡元盛が、治療を要する管理四の塵肺の概況を報告している。それによると昭和二十三年（一九四八）から五十四年（一九七九）三月まで三十一年三ヵ月間の認定珪肺患者総数は二〇九例（内三例は女子、手選婦）であった。そして昭和二十七年（一九五二）から五十四年（一九七九）までに一二一例が死亡したが、その間に約一五～二〇年の生命延長がみられた。死亡例の過半数は珪肺結核で昭和三十九年（一九六四）までに多くみられた。その後は合併症の肺がん死が多い。松岡所長は佐渡の益田玄皓が紫金丹の薬法を授けた門人の松岡玄盛の子孫で、松岡家は長く「紫金丹屋」とよばれたという。

（労働科学研究所）